

国際平和

vol. 16 - 1 2008. 8.26

ミュージアム だより



CONTENTS

- 2・ **スポット** 蒙古聯合自治政府肇建功勞章とその証書
- 3・ **巻頭つれづれ** 『語り伝える空襲』全5巻を執筆して
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長 安斎育郎
- 5・ **館長だより** 映像と表象—映像からどんな情報を読み取るのか—
立命館大学国際平和ミュージアム館長 高杉巴彦
- 7・ **ミニ企画展** 開催報告 (2008年3月~2008年8月)
- 8・ **ここが見どころ** ベトナム戦争—ベトナムさん・ドクさんとの出会い—
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 桂良太郎
- 9・ **運営委員リレー連載** 五条坂を歩く—考古学と戦争と伝統工芸—
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 木立雅朗
(立命館大学文学部教授)
- 11・ **ミュージアムおすすめの一冊**
今橋映子著『フォト・リテラシー—報道写真と読む倫理』
(中公新書 2008年5月25日刊)
- 12・ **事業報告** 2008年度特別展 ベトナム反戦ポスター展
—アーティストからのメッセージ—
- 15・ **事業報告** 夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2008
- 16・ **事業報告** 小・中学校教員対象下見見学会
- 17・ **事業報告** 博物館実習受け入れ
- 18・ **事業報告** 『花はどこへいった』映画上映会
- 19・ 祝! 入館60万人達成
- 20・ 第6回国際平和博物館会議開催
- 21・ 平和へのメッセージ—常設展示見学者の感想—
- 22・ 2007年度入館者状況、編集後記
- 23・ ミュージアムインフォメーション



蒙古連合自治政府肇建功労章とその証書

この蒙古連合自治政府肇建功労章と肇建功労章証書は、1939年に「蒙古連合自治政府」からある日本人軍人に贈られたものです。

箱のおもては漢字とモンゴル文字で書かれ、徽章は遊牧民と羊がデザインされています。証書前文は中国語で、蒙古連合自治政府から建国に貢献したことを称えてこの章を贈ることが書かれています。日付は蒙古連合自治政府の元号であった「成吉思汗紀元」七百三十四年九月一日。中央にある政務委員長の書名はモンゴル文字です。左端に名前が出てくる政務院総務部長関口保は、日本の内務官僚で蒙古政府顧問であった人物です。

蒙古連合自治政府は、内モンゴルの徳王らが、中国大陸に侵略していた日本軍の支援を受けて独立させた地域です。日本は満州国だけでなく、モンゴルでも中国からの独立を目指す動きを利用して傀儡政権を樹立していました。

証書にある「成吉思汗（ジンギスカン）紀元」とは、蒙古連合自治政府が独立の際に制定した年号です。昭和12年10月23日を「成吉思汗紀元七百三十二年」と決めました。土地の占領が空間の支配であるなら、年号の制定は象徴的な時間の支配です。徳王は、内モンゴル、外モンゴルの統合を目指す汎蒙古主義の考えの持ち主でした。蒙古連合自治政府がモンゴルをまとめ、大帝国を築いたチンギス・ハーンの歴史を継ぐことを主張したかったのでしょう。

ところで、当時の日本でも、チンギス・ハーンに対する親近感は強かったようです。「チンギス・ハーン＝源義経」という説もありました（現在はこの説に妥当性がないことが証明されています）。大正13年に発行された小谷部全一郎の『成吉思汗は源義経也』によれば、成吉思（げんぎす）は、二ロン族のエゾカイとメルトキ部のホエルン・イケの間に生まれましたが、これは日本が二ロンとなまり、蝦夷海を渡ってきたことが父の名として伝えられ、母イケの名は義経の命を助けた（清盛に助命を願った）池の禅尼に通じているのです。そして、成吉思（げんぎす）とは源義経（げん・ぎ・けい）のことなのです。そのほかにもさまざまな歴史解釈や日本と蒙古の比較を通して成吉思汗は源義経であるとの説を唱えています。

蒙古連合自治政府肇建功労章



章：直径3cm リボンつき

箱：10.7cm(縦)×6cm(横)×2.28cm(厚み)

年代：1939年

寄贈者：嶋 庄一

肇建功労章証書

縦 / 33.0cm

横 / 39.0cm

年代：1939年

寄贈者：嶋 庄一



この説の背景には、日本と周辺アジアの類似性を指摘し、ヨーロッパの横暴に対して日本がアジアのために立ち上がるという、侵略正当化の図式を示す狙いが見えます。『成吉思汗は源義経也』の結びには、「一般人類の幸福と世界の平和のために人種的差別撤廃を唱道する日本をして、亜細亜は亜細亜人の亜細亜なりと主張するの止むなきに至らしむ。」とあります。

『語り伝える空襲』 全5巻を執筆して

立命館大学国際平和ミュージアム
名誉館長 安齋育郎

『語り伝える』シリーズの刊行

私は、このところ、新日本出版社から刊行されている『ビジュアルブック語り伝える』シリーズの執筆に取り組んできました。第1回目は『ビジュアルブック語り伝えるヒロシマ・ナガサキ』全5巻で、第1巻 あの日、家族が消えた！ ヒロシマへの原爆投下、第2巻 天主堂も友達も消えた！ ナガサキへの原爆投下、

第3巻 原爆はなぜ落とされたのか？ 第4巻 あの日を忘れない 被爆体験を語り伝える（広島編）、第5巻 平和をひろげよう 被爆体験を語り伝える（長崎編）の5巻から成り立っています。幸いこのシリーズは「第7回学校図書館出版賞」を受賞し、学校図書館や地域図書館に広く普及されました。このシリーズには、山口仙二さん、谷口稜暉さん、下平作江さん、沢田昭二さん、加百智津子さん、杉山秀夫さんなど、私の知人の被爆者たちにたくさん登場して頂きました。それぞれの被爆者の体験は胸を打つものばかりです。

アメリカのスティーン・オカザキ監督の映画『ヒロシマ・ナガサキ』の冒頭、渋谷駅頭を通りかかる若者の誰一人として「1945年8月6日は何の日？」という質問に答えられないという場面が出てきます。立命館大学国際関係学部の平和学受講生に「これまで核兵器が実戦で使われたケースについて、使われた年月日/使われた都市/使った国を書きなさい」という質問をしたところ、「1945年8月6日/広島/アメリカ」「1945年8月9日/長崎/アメリカ」と正答した学生は71.7%でしたから、おそらく、「1945年8月6日は何の日？」と聞いてもかなりの高率で正解するでしょう。しかし、映画では「地震か何かあったかしら？」といった状態で、ごく普通の若者の場合、人類初の原爆投下でさえも忘却のかなたへ消え失せてしまっているようです。その意味で、映画や展示で絶えず人類史的出来事を思い起こす機会を創ることは大切なことなのでしょう。「過去を忘れることは、同じ過ちを繰り返す」

返す」ことにもつながりかねません。心したいものです。

『ビジュアルブック語り伝える』シリーズ第2弾は『ビジュアルブック語り伝える沖縄』全5巻で、第1巻 沖縄のいま、むかし、第2巻 沖縄戦はなぜおきた？ 第3巻 島ぐるみの悲劇の戦争、第4巻 美ら島と米軍基地、第5巻 命どう宝のころ、の5巻から成り立っています。幸い、このシリーズも「第9回学校図書館出版賞」を受賞しました。第1巻では大きな本屋さんにはたいてい「沖縄コーナー」があるのはなぜかという話題を取り上げ、第2巻では、中国と冊封・朝貢関係を結んでいた琉球王国時代から日本の沖縄県に組み込まれていく歴史を概説、沖縄が本土防衛のために犠牲にされていく過程をたどりました。その中で、1903（明治36）年の第5回内国勧業博覧会では、東京帝国大学人類学教室の協力の下で設営された「人間館」で、琉球人が「未開人」として陳列されたことも紹介しました。第3巻ではすさまじい沖縄戦の実態を詳しくまとめましたが、南へ南へと逃げることを余儀なくされたたくさんの人々が、最後は「ギーザバンタ」と呼ばれる断崖絶壁から投身自殺を遂げたため、アメリカ兵はこの断崖を「スーサイド・クリフ（自殺の断崖）」と呼んだことも紹介しました。また、第4巻では、「米軍基地の島」としての沖縄を紹介し、その中で、ベトナム戦争に派遣された元アメリカ海兵隊員アレン・ネルソンさんの証言も採録しました。ネルソンさんは、攻め込んだ壕の中でベトナム女性が産み落とした赤ん坊を自分の手のひらに受けるという稀有の経験をしたのですが、人殺しの方法しか訓練されてこなかったネルソンさんには衝撃的な体験でした。このことがあってネルソンさんは「アメリカ人もベトナム人も同じ人間だ」という強い思いをもつに至り、今では反戦・平和のために世界を飛び回っています。第5巻では沖縄に伝わる「命こそ宝だ（ヌチドゥタカラ）」という心を伝えることを心がけ、沖縄県下の平和資料館（沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、南風原文化センター、対馬丸記念館、ヌチドゥタカラの家、佐喜真美術館、八重山平和祈念館）を紹介しました。

そして、『ビジュアルブック 語り伝える空襲』全5巻へ

出版社は前の2つのシリーズが連続して学校図書館出版賞を受賞して意を強くしたのか、第3弾として『ビジュアルブック語り伝える空襲』全5巻を企画し、2008年4月～7月に刊行しました。全国47都道府県

の空襲被害をまとめたものですが、第1巻 10万人が殺された日 東京大空襲と北海道・東北の空襲、第2巻 日本が戦場になった日 那覇空襲と関東の空襲、第3巻 ふりそそぐ爆弾の雨 愛知空襲と東海・北陸甲信越の空襲、第4巻 逃げまどう市民たち 大阪大空襲と近畿・四国の空襲、第5巻 人類初の核攻撃 広島・長崎の原爆と中国・九州の空襲、から構成されています。

私は東京大空襲の数ヶ月前まで、まさに東京大空襲の激甚被災地に住んでいました。生まれは1940（昭和15）年、つまり「皇紀2600年」で、9人きょうだいの末っ子。父48歳、母43歳。最近、この年代の母親について「羊水が腐っている」という信じがたい表現を吐いた歌手がいたそうですが、わが母が聞いたら何と感じたでしょうか。1945年3月10日の東京大空襲の数ヶ月前に、私は父母の郷里である福島県安達郡二本松町（現在の二本松市）に縁故疎開して助かりましたが、疎開先でも雨の夜に母親に背負われて、ぬかるんだ赤土の防空壕に逃げ込んだかすかな記憶があります。そんな幼い記憶と重ね合わせながら『語り伝える空襲』を書き進めていくうちに、本土空襲がいくつかの段階を画することを改めて強く感じました。第1期は、真珠湾攻撃の4ヵ月後の1942年4月18日に航空母艦ホーネットから飛び立ったB25による東京・名古屋・四日市・神戸などへの空襲です。史上初の本土空襲でしたが、アメリカにとっては「真珠湾攻撃に対する報復」という意味をもっていました。軍部も国民も大変驚きました。第2期は1944年6月15日、中国の成都の前線基地を飛び立った47機のB29戦略爆撃機が北九州の日本製鉄八幡製作所に対して加えた空襲で、アメリカの世論は大いに沸きました。第3期は、サイパンやテニアンなどのマリアナ諸島がアメリカの手に落ちて、そこに築かれた米軍基地から直接B29が大量に飛来し、直接本土空襲を実行するようになった時期で、これがさらに3期に分けられます。第1期は、ヘイウッド・ハンセン司令官の指揮下で10,000m近い高空から爆弾や焼夷弾を落としていた時期で、偏西風に流されるなどして十分な戦果を上げられなかった時期です。第2期は1945年1月に司令官がカーチス・ルメイに変わってからとりわけ顕著になった「夜間・低空・焼夷弾無差別爆撃」の時期で、東京大空襲をはじめ日本中の都市が次々と攻撃され、夥しい数の犠牲者が生み出されていった時期です。第3期は、そのような無差別爆撃によって日本を疲弊の極に追い込んだ果てに加えられた広島・長崎に対する原爆投下という人類初の核攻撃です。

私は、『語り伝える空襲』全5巻を書きながら、日本が侵略戦争の果てに受けた戦禍の悲惨さを今更のように思い知らされました。

太平洋戦争が始まって2年目の春（1943年）、京都市内の国民学校の校長先生は、卒業生に次のような祝辞を送りました。もともとの言葉は古い表現が多いので、意味の概要を紹介しましょう。

最初に、「大東亜戦争（＝太平洋戦争）が始まって1年余り、皇軍（＝天皇の軍隊）は天皇陛下のご威光のもとで東西南北、陸海空、ことごとく勝利を収めている」と述べた上で、「いま日本は、わが国を中心とするアジアの新しい秩序を建設する途上で苦悩しているが、それを敢然と（＝勇気をもって）乗り切れるかどうかは皆さんの肩にかかっている」と続けました。そして、「天皇陛下の思召しをありがたくいただき、お国に身を捧げるために修養を積まなければならない」と訓示したあと、次のように述べたのです。

「私は『強く生きよ、最後まで頑張れ』さらにまた『征け、戦へ、死ぬ』、この二語をはなむけとして皆さんの門出を勇ましくも送り、かつ、記念写真にそえる言葉といたします」。

とても残酷な感じがしますが、日本が戦争を進めていた時代には、教育者が教え子に死ぬことを命じなければならなかったのです。

あの太平洋戦争が終わった直後は、「戦争は2度とすべきではない」という声は政治信条をこえた普遍的な主張でしたが、近年、憲法改定の問題とも関わって、戦争を論じることが再び「政治化」されつつあるように思われます。もう一度、あれこれの政治信条の違いをこえて戦争の惨禍を心に深く刻み込む必要がある。そんな思いが、『老兵は死なず』の中で「晩年は平和の語り部として生きる」決意を述べられた野中廣務さん（元・内閣官房長官）に、第6回国際平和博物館会議の記念講演をお願いした気持ちの底にあります。



映像と表象

映像からどんな情報を 読み取るのか

立命館大学国際平和ミュージアム
館長 高杉 巴彦

今年の6月15日、NHK教育ドキュメンタリー番組「アンジェイ・ワイダ 祖国ポーランドを撮り続けた男」を視ました。

ポーランド映画界の巨匠、アンジェイ・ワイダ監督の最新作映画「カティン」。これは1940年に旧ソ連領で起こったポーランド軍将校や官僚の大虐殺事件、「カティンの森事件」の真相に迫る作品であり、ワイダ監督の父がこの事件で犠牲者となっていたのです。事件は、当初ナチスドイツによる虐殺事件とされ、社会主義政権下のポーランドでは50年の間、タブーとされて来ましたが、1990年になってソ連のゴルバチョフが関与を認めるに至ったものです。

番組では、ワイダに単独ロングインタビューを行って、ワイダ監督がこの映画をつくり上げるまでの映画監督人生を、ワイダ自身の言葉と、今まで埋もれていた「検閲議事録」や「手帳」「絵コンテ」などの初公開資料も含めて伝えるものでした。実はこの番組は、私の高校教師時代の教え子である奥村浩さんがプロデューサーをしたものでした。

私が大変興味を覚えたのは、大戦後、旧ソ連の衛星国として社会主義政権下にあったポーランドの国家体制下で、脚本や映像に対する検閲をくぐりぬける表現を工夫したり、また妥協を余儀なくされたりしながらも、ポーランドの真実を撮り続けようとして多くの作品を創りあげたワイダ監督の表現者としての姿であります。またその根底にある市民ワイダとしての魂の叫びを、映像というもので表象していく力強さでありました。

ワイダの姿勢には、18世紀末に地図から抹殺されたポーランドが生き延びられたのは言語が生き延びられたからであり、芸術家は文学を大事にしてきたし、映画人・知識人としての使命や政治的社会的責任を持つのがポーランドの美しい伝統である事が見てとれます。

私たちは、こうしたバックボーンを持って創られた

映像の、一つ一つの場面やカットに込められた表象をどれだけ汲み取る力があるのでしょうか。抑制された（抑制させられた）映像にどれだけ多くの情報が存在しているのかを、読み取る力量が問われていることを痛感しました。

彼の作品にはいわば「戦争の世紀」であった20世紀、ドイツやソ連をはじめ大国に翻弄されたポーランドの姿が刻まれていて、「灰とダイヤモンド」では終戦後のポーランドでのソ連に対する抵抗を描き、「大理石の男」では政権下の弾圧や虚偽の情報に立ち向かい、「鉄の男」では生まれつつあった自由への期待を表現したのでした。

1956年につくられた映画「地下水道」では、対戦中のナチスに対する民衆蜂起が描かれています。蜂起に破れて地下水道に逃げ込んだ男女が、川に出る手前で鉄格子に阻まれます。川の水と緑の草が日の光に眩しく見えます。そして対岸をカメラは映し出します。映像には現れませんが、実は対岸にはソ連軍が布陣して居り、ポーランド民衆の期待を裏切って、ソ連軍はついに民衆蜂起に呼応してナチスに攻め入ることをしなかったのです。映像はそのことを、見る人の想像力で補うことを求めたわけですし、またポーランド人ならば容易に理解した映像でした。これが検閲のぎりぎりの線でした。

1976年に製作の「大理石の男」の中で、1970年におきた生活向上を求める労働者のストライキを政府が鎮圧した「12月事件」が描かれています。犠牲者が数百人にのぼったにもかかわらず、政府は公式にそのことを認めようとはしなかったことについて、ワイダはこれを表象映像で表現をしたのです。死者の墓にお参りしようとした女性が墓が無いので探しても見つからず、しかたなく墓地公園の入り口の鉄柵にそっと花束を懸けて立ち去るシーンとして描いています。この表現は当初検閲で削除されました。後に「鉄の男」で復活することになるのですが、このシーンからその意味を読み取る力が観客には要求されるわけです。

私はこうしたことから、もうひとつの有名な映画のシーンを思い起こします。

それはドキュメンタリー映画として作成された、亀井文夫の作品「戦ふ兵隊」です。この映画は、1939年に陸軍省の後援で作られた国策映画であり、武漢作戦を中心にした戦意高揚を目的としたもののはずでした。しかし出来上がった映画には「疲れきった兵隊」の表情ばかりが映され、結局上映不許可になったものです。特に、戦地での兵隊の移動中に、病気で使えな

くなって捨てられた馬のシーンは有名で、軍隊が遠ざかって消えていくその後で、捨てられた病馬が、よろよろとふらつき、最後に沈むように倒れこんでいく情景は、哀感が漂い厭戦的な気分があらわれるものです。しかも移動する軍隊の側ではなく、馬が死んでいく姿を、軍隊とは反対側からしかも長いカットを通して撮影しているのです。

ほかのドキュメンタリー映画でも、亀井文夫は、中国で入城行進をする日本軍隊を迎える祝賀行列とともに、その背後で無表情でそれを見つめる多数の中国人の様子を、やはり長いカットで映し出しているなど、客観的でリアルな映像によって、象徴的に表現したいものを表象しているのです。それでも、いやそれだから亀井文夫も治安維持法違反容疑で逮捕されることになるわけです。

今まで、抑制された（抑制させられた）映像にどれだけ多くの情報が存在しているのかを、語ってきましたが、今日、どれほど「過剰な映像」が、しかもどのメディアからもニュースソ - スの同じ映像が流れていることでしょうか。しかしそこにはほとんど同種の情報しか載せられず、「情報の不在」が問題になっています。

例えば、1994年6月におきた松本サリン事件。第一通報者の河野さんが疑われ、奥さんが被害にあっているにもかかわらず、自宅から農薬などが発見されたことから犯人扱いされ、警察情報をそのまま鵜呑みにしたマスメディアも、情報をそのまま全国にたれ流し、加熱していくという失態を招きました。後にマスメディアは、そのことに反省の作業を行いました。あの時、私自身ニュースでその発表を聞き、すぐさま「おかしい。疑われる状況をこんなに残し、しかも奥さんが重態である（2008年8月に死去）というのでは、犯人にはお粗末過ぎるし、警察情報のほうを疑うべきである。」と家族や学校の学生諸君に話をしていました。素人の私でも疑問が持てるような情報の中から、真実を読み取る努力もせずに情報を広げたマスメディアの玄人たちの責任は重大であります。

私がかつて校長をしていた北海道の学校の卒業生が、イラクで人質で捕まったときの報道も同様でした。行動そのものは、確かに慎重さを欠き、無謀ともいえるものでありました。しかし彼は高校在学中から決して一人で浮き上がった行動をする生徒ではなく、クラス活動や、修学旅行での班長の仕事や、また友人との交流も丁寧に進めていく生徒でありました。その彼が、卒業後秋にロンドン留学するまでの間に、かねて調査していた「劣化ウラン弾」について調査したいという

ことで、現地に行ったものの様でした。

しかしマスメディアは衝撃的な「人質映像」とともに、「自己責任」論を沸騰・展開させたのでした。アメリカのパウエル国務長官が「よい目的のために勇気ある行動をした市民がいることを日本人は誇りに思うべきであり、彼らを守るのが国家の責任です。」といったこととはまったく対照的でした。学校には「そんな生徒を生み出した学校には子供を送らない。」をはじめとして圧倒的な非難のメールと、一部の励ましをいただいたものでした。救出された後も、「輸送の飛行機代金を全額彼らが持つべきである。」との論調が流れたままでした。しかし事実は、彼らは自分たちで飛行機のチケットを買って帰国する意思を表明していたのですが、政府によって身柄を確保されて帰国をしたのです。このときも「過剰な映像」と真実の「情報の不足・不在」のなかで、判断を的確に下せる状況からは程遠い事態が作り出されていたのです。

映像は特にコンピューター的に言えばそのピクセル数という情報量は多いはずですが、しかし、私たちが、人類の共生と持続可能な地球の進展にとって重大な課題を、科学的にかつ人間的に理解し、深い洞察と行動判断していくための情報としては、かえって映像の情報量の方が不足しがちであります。平和の問題はとりわけ、人類一人一人の能力の全面的開花と結びつかねばならない以上、エモーショナルな情報の過剰なシャワーから位相をずらして、「情報の確かさ」を判断できる力量をつけていきたいものです。

開催報告

(2008年3月～2008年8月)

今号では2008年3月から2008年8月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

1. ラストフロンティア～東ティモールの光と影～

▶ 2008年3月19日(水)～4月13日(日)

開発途上の子供を支援するNPO法人「国境なき子どもたち(knk)」との共催写真展。立命館大学が母校である写真家・渋谷敦志氏が、東ティモール民主共和国において2006年11月から2ヶ月間滞在し、「東ティモール光と影」をテーマに、取材・撮影した写真30点を展示しました。また、4月13日には、渋谷氏とknkスタッフによるギャラリートークを開催しました。

2. 「安全保障」と女性の権利

沖縄の過去と現在から学ぶ

▶ 2008年4月19日(土)～5月11日(日)

「安全保障」を、女性の人権という観点から考えるWILPF京都が、日本軍と米軍をめぐる沖縄の女性たちの経験について学んだことを紹介し、さらに、女性の人権と軍隊の問題に取り組む、日本や世界の市民運動、そして国連の活動などを紹介しました。

3. ミュージアムこの1てん

ベトナム医療援助アピールのポスター

▶ 2008年5月14日(水)～6月6日(金)

特別展「ベトナム反戦ポスター展 アーティストからのメッセージ」と連動して、同時代に作成された「ベトナムへの医療援助のアピールのポスター」を紹介しました。かつてベトナムの人々は、腐敗した政権とアメリカ軍に抵抗し、また世界中ではベトナムの人々を支援し戦争に反対する運動が起こりました。紹介ポスターは、こうした動きの一環としてベトナムへの医療援助を訴えています。この医療ポスターの他、関連ポスター2点をあわせて展示しました。



ベトナム医療援助アピールのポスター

4. ベトナム戦争と子どもたち

～平和村の人々、そして子どもたち～

▶ 2008年6月10日(火)～7月4日(金)

ベトナム南部最大の産婦人科病院・ツーズー病院(ホーチミン市)では、日本で分離手術を受けたベト君、ドク君をはじめとする先天性障害を持つ子どもたちへの医療ケアを行っています。日本ベトナム友好協会の東茂子氏が、同病院をボランティアとして訪れ、撮影した子供たちの写真、約40点を展示しました。ベトナム戦争でアメリカ軍が散布した枯葉剤の影響と考えられる重症の先天性障害を抱えながらも、元気にたくましく生きる子供たちの日常をとらえています。

5. 資料と写真でみる浮島丸訴訟

～遺骨問題の新たな展開に向けて

▶ 2008年7月8日(火)～7月26日(土)

戦争終結直後の1945年8月24日、京都府の舞鶴湾で海軍輸送艦の浮島丸が爆発沈没しました。乗船者の大多数は帰国のために乗船していた韓国人でした。この事件は後に、「浮島丸事件」と言われます。その後、日本政府は日本人乗組員の死傷者には補償しましたが、韓国人には遂に何の補償もしませんでした。その為、遺族たちは、父親がどこでどのように亡くなったのか、何も分からないまま長い年月を生きてきました。そして、1992年になって、やっと浮島丸事件で死亡したことが判明し、日本政府に公式陳謝と賠償を求めて裁判を起こしたのです。本展では、これまでの浮島丸訴訟を追ってきた「朝鮮人徴兵・徴用に対する戦後責任を求める会」が、遺族たちの悲しみや怒り、日本の戦後責任や裁判の経緯などを、文書資料や写真を交え紹介しました。

6. 国民学校って知っていますか？

▶ 2008年8月3日(日)～2008年8月30日(土)

1941年に、小学校は、国民学校へと変わりました。それまでの小学校は、国民として必要な道徳や知識を身につけるための学校でしたが、国民学校は、天皇の国民として、国民を訓練する学校であるとされました。中国にせめこんで始めた15年戦争が長引いていた上に、アメリカなどとの間で太平洋戦争を始めたので、日本の全ての国民や資源を使って戦う仕組みが必要になりました。日本が行っている戦争は正しく、国民なら従わなければならないという宣伝が実に多く行われました。国民学校の教科書やおもちゃの中にも、戦争に関係するものがたくさんあります。本展では、当時子供たちが使用した教材や生活用品など、ミュージアムの所蔵資料の中から展示しました。

ベトナム戦争

ベトナムさん・ドクさんとの出会い

立命館大学国際平和ミュージアム
副館長 桂 良太郎

みなさんは、地下一階の展示コーナーの一つに「ベトナム戦争」のコーナーがあるのをご存知でしょうか。今回はぜひこのコーナーを紹介したいと思います。

まず目にするのは、アメリカ空軍と戦うベトナム解放戦線の人々の写真でしょう。そしてすぐとなりには、アメリカ軍がばら撒いた「枯葉剤」によるおそろしい被害の状況を写したジャングルの写真と、そのすぐ下におおきな目をくりくりさせている、二重双胎児として、一つの下半身に二つの上半身をもってこの世に生を受けた「ベトナムくん、ドクくん」の写真を目にすることができます。

みなさんは、安齋名誉館長が昨年発表された「館長声明 ベトナムちゃんが亡くなりました」をお読みになられましたでしょうか。そのなかで、安齋先生は、くわしくベトナムさん、ドクさんのことを書いておられますのでぜひお読みください。

筆者がはじめてベトナムと関わったのは、1994年からでした。当時はハノイもホーチミン市も貧困で苦しむ多くの人々や、道端にはその日暮らしのストリートチルドレンにあふれ、教会のまわりには、手や足を失った障害者の人たちが手製の車輪を付けた板の上に乗ながら金銭を求める様子が今でも目に焼きついています。それ以来私は毎年ベトナムに行くようになりました。その当時とくらべ、今ではすっかりその街の様子が一変し、ストリートチルドレンやシクロといって貧困の象徴とも見られる人力車はほとんど都心では目にすることがないほど、ハノイやホーチミン市は世界の有名な観光都市として大きく変貌しようとしています。

ドクさんは小生がいつも彼を日本料理屋へ連れて行くもので、いつの間にか、小生の名前をもじって「すし太郎先生」といって私のことを覚えてくれるようになりました。お兄ちゃんのベトナムくんは弟のドクくんの結婚を見届けたあとすぐに天国へ行ってしまいました。彼が生きた26年間の生き様はほんとうに我々に命の尊さを教えてくれました。失ってみて、はじめて彼の存在の意義を感じます。

彼らが私たちに教えてくれていることは、いったいなんでしょう？ それは生きることの大切さ、家族や兄弟の絆の大切さではないでしょうか。戦後60数年たったわが国はその間、家族の絆や地域社会での真の助け合いの関係を粗末にしてきました。そのために、いまでは、多くの犯罪はじめ、家庭内暴力はじめ、孤独死に代表されるさまざまな社会問題を抱える国になってしまいました。戦争は家族や地域社会を破壊していきますが、皮肉にも一方においてそれらの価値を人々のこころに見出してくれるものをもってあります。

ベトナムはつい最近まで、ベトナム戦争やカンボジアとの内戦を経験してきました。それゆえ平和への希求はひとかたならないものがあると思われます。将来のベトナムの姿はやがて今日の日本のようになるのでしょうか。私は決してそうならないでほしいと願う者のひとりです。このコーナーの写真を見るにつれ、ベトナム戦争を勝利に導いてきた国民の一人ひとりの独立への熱望と努力が今日のベトナムの繁栄へとつなげたものであり、貧困であるがゆえに、その貧困から逃れる知恵が必然的に彼らの笑顔や微笑として現れ、一方のしたたかな振る舞いのなかにも、ベトナムの人々のもつ生きる力強さ人間力といったものをこれらの写真から感じ取れることでしょう。

なお、現在国際平和ミュージアムでは、北ベトナム政府やベトナム支援団体から送られてきた、おびただしい北爆に関する当時のビデオフィルムを抱えており、それらをDVD化しております。ベトナム戦争とはいったい何であったのかを再考されたい方々は、ぜひこのDVDをメディア資料室にてご観覧ください。



1981年、体がくっついた双子のベトナムくんを見まもる医師のフォン博士(撮影:中村梧郎氏)



ドクさん夫婦と筆者

五条坂を歩く

考古学と戦争と伝統工芸

立命館大学国際平和ミュージアム
 運営委員 木立雅朗
 [立命館大学文学部教授]

私の専門は焼き物(窯業)に関する考古学です。近年の考古学研究は、近世や近現代にまで範囲を広げであり、古文書を扱う文献史学、伝承や民話などの聞き取り調査を行う民俗学との接点が大きくなっています。

登り窯の火が消えても

聞き取り調査をする考古学

五条坂は京焼・清水焼の伝統的産地として有名です。かつては多くの登り窯が煙を上げていましたが、公害防止のため昭和40年代には登り窯の使用が禁止され姿を消してゆきました。今はいつくかの登り窯が大切に保存されています。かつて、これらの窯と苦楽を共に歩んでこられた陶工の皆さんからお話を伺うと、当時の様子がよくわかります。考古学研究者が普段相手にしている考古資料は「物言わぬ資料」ですが、生々しい証言はまるで魔法のように登り窯を蘇らせます。焼き物に限らず、さまざまな手工業生産の歴史を調べる場合、京都の伝統工芸は大変すばらしい参考資料です。

そのような絶好のフィールドを歩いていると、否応なしにぶつかる意外な事実がありました。それは、アジア・太平洋戦争の遺産です。

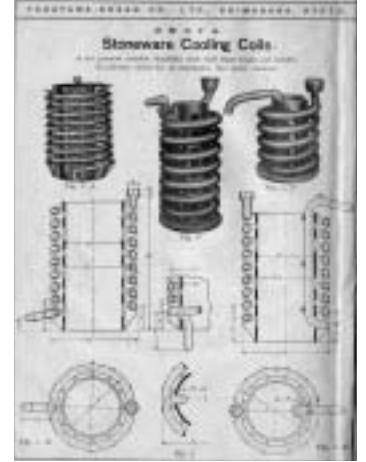
理化学陶磁器の生産

かつて、京都の理化学陶磁器は全国的に有名でした。明治時代以降、産業の西洋化とともに理化学陶磁器が京焼窯元へも注文されました。酸に耐えることや電気を通さないことなど、陶磁器の性質が活用されました。そのために西洋の技術や知識が導入され、窯業の近代化に大きな役割を果たしました。京焼の伝統的な技法もその影響で革新されました。

高山耕山の毒ガス精製装置

毒ガス工場があったことで有名な広島県大久野島に

は、「蛇管」と呼ばれる陶器製の冷却装置が使用されていました。毒ガス資料館に展示されている蛇管には「高山耕山」という、京都を代表する理化学陶磁器の窯元の刻印が押されています。腐食しない性質が適していたのでしょう。1940年に発行された高山耕山のカタログにも蛇管が掲載されています。



高山耕山化学陶器株式会社のカタログ

藤平陶芸で作られた軍需品

五条坂の藤平陶芸では、ロケット戦闘機「秋水」の燃料精製装置の注文を軍から受けます。大型品だったため、わざわざ石炭窯を築造して生産に当たりましたが、焼成中に終戦を迎えました。工房には納品されなかった製品が今も残されています。また、二宮金次郎の陶器像も製作していました。学校に設置された二宮金次郎の銅像を供出し、その代わりに陶器像を安置するためです。

終戦末期になると陶器製手榴弾の弾体も作りました。これも軍に納品する前に終戦を迎えたようです。今のところ、京都で作られた弾体は戦地で出土していません。実戦配備が間



藤平窯業の陶器製手榴弾弾体

に合わなかった可能性があります。しかし、信楽や有田などで作られた弾体は硫黄島や沖縄本島・レイテ島で出土しており、実際に使用されたことがわかっています。「集団自決」にも使われたと思われます。そのことを考えると、藤平陶芸に残されていたこれらの武器類は、出荷される前に終戦を迎えた幸運な焼き物だったと言えます。

西陣織と鑄造 焼き物以外の伝統工芸

西陣織のような高級織物は、贅沢品として戦争に関わることは少なかったと思いますが、その図案(下絵)には軍国絵柄が確認されます。軍国絵柄の着物は各地

で生産され、侵略を鼓舞する役割を果たしていました。西陣織も例外ではなかったことが分かります。

あまり知られていませんが、平安京以来から続く京都の伝統工芸とし



爆弾三勇士を描いた西陣織の図案

て鑄造業があります。さまざまな銅器が現在も鑄造されています。和鏡の製造所もあり、国内の神社はもとより、関東神宮や南洋神社など、植民地に作られた神社の御神体（鏡）も作られました。戦前には鏡の注文が裁き切れないほどあったと言いますが、戦後は長い間注文が途絶えました。伝統的な和鏡は鑄造のなかでも極めて高い技術が必要で芸術的にも優れていました。その技術も戦争によって一度は発展しながら、その終焉によって奈落に突き落とされたのです。

歴史遺産と「負の遺産」

京都の歴史を「負の遺産」だと考える人は少ないでしょう。「戦争の被害者であったとしても、加害者ではなかった」というのが普通の考え方でしょう。「京都では前の戦争と言えば応仁の乱のこと」、などという例え話を耳にすることがあります。京都の長い歴史を誇る意味があるようですが、歴史を知らない冗談にしか聞こえません。蛤御門の変（1864年）では市中のほとんどが火災にあっており、その時の焼け土が市街地のあちこちから出土しています。また、アジア・太平洋戦争の時には京都も軍需工場と化していました。

五条通りが幅広いのも、戦中に強制疎開が行われたためです。戦後、国道一号線が今の五条坂に通されたのは強制疎開のお蔭ですが、それらによって陶磁器の町・五条坂の分断が固定化され、五条坂に癒やし得ない大きな傷跡を残しました。

それ以外にも、京都には沢山の戦争の痕跡があります。1200年の歴史をもつと言われる京都にとって、戦争は切り離せないものです。「京都の歴史は戦争の歴史」と言ってもよいでしょう。私たちはそうした戦禍をくぐり抜けて勝ち残ってきた、たくましい伝統文化を享受しているのです。伏見の酒のように、深草の師団に供給することで発展した「伝統」もあります。

ところで、「日本に京都があつてよかった」というキャッチフレーズは、「日本人の心」をつかんでいるようです。私も心動かされることがありますが、その

言葉には深い意味を与えなければなりません。戦時中、人々の心を動かした原動力の一つに「京都を中心とした日本の文化」がありました。人々の心をついにし、無批判にさせる力の一つとして、京都とその歴史が力を発揮したと言ってもよいでしょう。原爆投下目標の第一番に京都が上げられていたことも、日本の象徴として内外に周知されていたことをよく示しています。

侵略に係わる歴史遺産を「負の遺産」として強調したり、他の歴史遺産と区別することがありますが、そうしたことに疑問を感じることもあります。すべてが戦争に関わり被害を受けながらも、その恩恵も受けていました。また、戦後復興を果たすとき、軍需産業として優遇されてきた「遺産」がその基盤となりました。戦争中はひどい目にあったのですが、軍需品を作っていたために軍部から配給があり、食べ物に困ることはありませんでした。機器類や資材も軍需景気によって整備されたものです。今、私たちが歴史を学び、さまざまな伝統工芸を享受できるのも、そうした歴史と無関係ではありません。それらがなければ、伝統工芸はとっくの昔に途絶えていたはずで

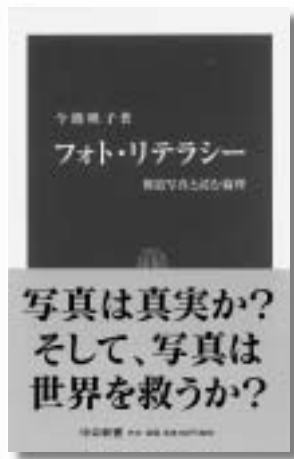
す。伝統工芸に加害の直接的な責任があるとは思いません。けれども、「100%正の遺産」など、存在しないでしょう。私たちの歴史や歴史遺産は、正と負に単純に分割できるものではありません。現在の暮らしのなかに、また、伝統工芸の中に、負の遺産は否応なしに抱え込まれているのです。京都で学ぶ私たちは、それらも抱きしめて暮らして行かざるを得ません。歴史は積み重ねられ、すべてを包み込んでいます。

祖父のこと

私の祖父は明治末の生まれで、中国に出兵した経験がありました。私がまだ小さな頃、晩酌をしながら「戦争はダメだ、わかったか」と孫に言い聞かせることが何度もありました。怪我をして助けてくれと叫んでいる中国人を置き去りにしたこと、彼らが不憫であったことを、繰り返し、繰り返し、聞かされ続けました。けれども、自分たちが中国で何をしてきたのか、詳しいことは最後まで語りませんでした。もし祖父が中国で許されない行為をしていたとしても、私にはやさしかった、そして大好きな祖父の記憶を消し去ることはできません。その記憶と日本軍が行った事実を胸に抱き留めるしかありません。祖父のことを思い出すと、必ず、祖父が繰り返した言葉がよみがえります。

大人になり、京都で学んだ今なら、祖父の言葉をしっかりと汲み取り、一緒に苦い酒を酌み交わすことができたのかも知れません。

今橋映子著 『フォト・リテラシー 報道写真と読む倫理』 (中公新書 2008年5月25日刊)



平和問題に関心を持って
いる人の中には、1枚の写
真に自分が突き動かされた
経験を持っている人が多い
のではないのでしょうか。あ
るいは、それが具体的な行
動に結びついていなくても、
印象深く残っている写真が
ある人は少なくないと思
います。

本書の著者である今橋映
子氏も、小学校高学年の時
に「おにぎりを持って茫然

自失とする原爆直後の母子の映像」や「ベトナム人の
少女が泣き叫びながら全裸で道を走ってくる姿」を見
て、「世界にはこんな不正や不幸が存在するのだとい
うことに幼い私は驚愕し、何とかしなくては、と頭を
ただ熱くさせた」と言います。

著者はもともと「パリ写真」の研究者でしたが、研
究を進める過程で写真と現実表象との関係を根本的に
問い直せざるを得なくなり、そうして執筆されたのが
本書だということです。しかし本書でまず提起される
次の4つの「決めつけ」は、読む者にとっていささか
刺激的であるかも知れません。

写真は、現実や真実を決して写せない。

決定的瞬間など、この世に存在しない。

ドキュメンタリー写真は、「やらせ」から出発した。

世界各地の戦争や悲惨を撮った写真は、世界の現実を変えはしない。

一見すると「そんなことはない」と否定してしまい
そうですが、実は私たちが報道写真に対して無意識に
期待する「事実をありのままに一瞬にして切り取って、
差し出す」という考えは、たかだかこの半世紀あまり
に形成されたものにすぎないのです。写真は「客観的
世界」の複製ではなく、幾度もの「選択」と「操作」
によって届けられた映像であり、添えられる「言葉」
や「物語」によってもメッセージは変わってきます。

そうした議論を踏まえて、本書の後半では写真を見
る側の姿勢が問われています。私たちは写真を通じて
異文化に触れることがあります。しかし「悠久の大地
インド」や「野生のサバンナ」などといった表象は
一体どれほど現実と地続きなのでしょう。こうしたオ
リエンタリズム（他者を故意に規定する言説）の議論
は文学や絵画、映画の領域で適用されてきましたが、
写真においてはあまりなされていないのではないかと
著者は述べます。

もうひとつ、一見誠実に見えながら議論的になっ
ているのが、ヒューマンイズムの写真表象です。1955
年にニューヨーク近代美術館で開かれた「人間家族」
展は、人類共通の生の営み（愛、結婚、誕生など）を
数百点の写真から構成し、世界中を巡回した試みでし
たが、人類に「普遍」の価値とは一体なんなのでしょう
。本書はこれがアメリカ的価値観の一元化と同義な
のではないかと指摘しています。実際、使われた写真
はアメリカの雑誌から提供されたものがその大半を占
めていたそうです。

この視点は、私たちが教科書や博物館で掲載されて
いる「報道写真」を見るときにも参考になるものでし
ょう。例えば、そこに掲載されている写真がピューリ
ツァー賞を受賞した「すばらしい」写真であることは
知っていても、同賞がアメリカのコロンビア大学と
いうたった1つの大学で選定・授与されている賞であ
ることを認識している人はどれだけいるのでしょうか。
世界の多くの場所で、この価値観が歴史を「記憶」す
るものとして受け継がれているのです。

また、写真を読む側の倫理が問われる理由はこれだ
けではありません。アメリカ人批評家スーザン・ソ
ンタグは著書『他者の苦痛へのまなざし』（2003）の中
で、残酷な写真には人々がそれを繰り返し見ることで
慣れてしまい、現実を変革するように働かないという
方向と、それでも現実の苦しみへと注意を向け、考え、
調査する契機になり得るという方向の2つが存在する
と述べました。本書はソンタグの議論を引きながら、
倫理を問われているのは「私」なのだと言います。世
界を変革するのは写真ではなく、その写真を見る「私」
でしかありえません。

本書では、この他にもいくつかの事例を挙げながら
「読む倫理」としての「フォト・リテラシー」が詳細に、
そしてわかりやすく説明されています。身の周りにあ
ふれる映像を読み解き、平和な社会を実現していくた
めの案内の書として、ぜひともお読みいただきたい一
冊です。

評者 / 岩間優希 [立命館大学先端総合学術研究科博士課程]

ベトナム反戦ポスター展

アーティストからのメッセージ



ベトナム反戦ポスター展展示室内の様子

会 期：2008年4月16日(水)～2008年7月21日(月)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール
参観者：14,979名
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：ちひろ美術館
後 援：京都府、京都市、
京都府教育委員会、京都市教育委員会、
京都市内博物館施設連絡協議会、
NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、
京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社

《開催記念講演会》



対談田島征三氏(右)と安斎育郎氏(左)

日 時：2008年4月26日(土) 13:30～15:00
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール(会場展示室内)
対 談：田島征三氏(絵本作家)
安斎育郎氏(国際平和ミュージアム名誉館長)
演 題：「街頭でアートが叫んでいた」
聴講者：50名



西村繁男氏

日 時：2008年5月17日(土) 14:00～15:00
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール(会場展示室内)
講 師：西村繁男氏(絵本作家)
演 題：「反戦野外展の頃」
聴講者：81名

《開催記念連続講座》 「ベトナム戦争と私」 会場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー



第1回 石田晋三氏

第1回

アメリカ北爆下のベトナムの人たち
日 時：2008年6月24日(火) 13:00～14:30
講 師：石田晋三氏
聴講者：50名



第2回 桂良太郎氏

第2回

ベトナムドクさんとの出会いから
日 時：2008年6月26日(木) 15:00～16:00
講 師：桂良太郎氏(国際平和ミュージアム副館長)
聴講者：38名



第3回 金丸裕一氏

第3回

横須賀とベトナム戦争

日時：2008年7月4日(金) 13:00～14:30

講師：金丸裕一氏(立命館大学経済学部副学部長)

聴講者：36名



第4回 安齋育郎氏

第4回

超大国をも負かした力 ベトナム戦争に何を学ぶか？

日時：2008年7月9日(水) 13:00～14:30

講師：安齋育郎氏(国際平和ミュージアム名誉館長)

聴講者：139名



第5回 高杉巴彦氏

第5回

トンキン湾事件・東京オリンピックと私

日時：2008年7月12日(土) 12:45～13:45

講師：高杉巴彦氏(国際平和ミュージアム館長)

聴講者：105名

4月16日(水)から7月21日(月)の間、2008年度特別展「ベトナム反戦ポスター展 アーティストからのメッセージ」を開催いたしました。今回の展示はベトナム反戦当時、絵やデザインを志す若者たちが反戦の思いを込めて描いた作品です。

ベトナムでは、1960年代前半から75年まで約15年にわたり、自由と独立を求めアメリカの侵略に抵抗する激しい戦争が続きました。米軍基地のある日本は兵器や物資の補給地としてアメリカ軍を支える役割を担っていました。一方で、テレビなどのメディアの普及によりベトナム戦争の惨禍が報道され、さまざまな反戦運動が起こりました。

1967年、子どもの文化に関わりのある児童文学者らが、和田誠デザインの「反戦バッグ」を製作し、それを広める運動を始めたことをきっかけとし「ベトナムの子どもを支援する会」が発足しました。同年11月にはイラストレーターや漫画家、デザイナー等の協力を得て、第1回反戦野外展を銀座の数寄屋橋公園で開催し、大きな反響をよびました。以後、絵やデザインを志す若者たちが中心となり、反戦野外展は1980年頃まで続いていきました。

立命館大学国際平和ミュージアムでは、戦争の歴史に学び、平和な未来を築くためになにができるのか来

館者とともを考えてきました。今特別展では、「ベトナムの子どもを支援する会」の反戦野外展複製パネルを展示し、当時の野外展の息吹を紹介するとともに、彼らのメッセージを見つめ直し、今日の戦禍の絶えない世界の現実の中で私達に何が出来るのか考えてもらう場にしていただきたく開催したものです。

会期中の4月26日(土)には記念講演会として、絵本作家田島征三氏をお招きし、「街頭でアートが叫んでいた」と題して、安齋育郎国際平和ミュージアム名誉館長との対談を展示室会場内で開催しました。つづいて、5月17日(土)には絵本作家西村繁男氏をお招きし、「反戦野外展の頃」と題し講演を開催し、反戦野外展に参加されていたお二人の貴重な話を多くの来場者に聞いていただける場となりました。

また「ベトナム戦争と私」と題した連続講座を展示室前のロビーで開催し、戦場から遠く離れた日本にあってベトナム反戦運動に心を寄せ、多感な青春時代をすごした5人の講師たちが、「ベトナム戦争と私」を語りました。

このベトナム反戦ポスター展を通して、多くの来館者の方々に今一度、私たちができること、あらためて平和とはなにかを考えてもらう場にしていただけたのではないかと考えております。

見学者の感想より

今回初めて来て、反戦の絵画を見て、世界の人々の戦争反対の意思を痛感しました。また、その絵画を描いた人は、どのような気持ちで描いたのかというのを考えると、自分の中の平和を願う気持ちが強くなりました。また来たいと思いました。(新潟県 中学生 男性)

アメリカの飛行機の惨がいから作った指輪 それへ宛てた少年の手紙で、心がはっとするものがありました。今、9条が問題とされています。安齋先生が言うように、9条に関心がある、守ろうと考えている人々ではなく、関心を持っていない人たちに9条の大切さ戦争のおろかさを伝えなければならないと思います。それはどのようにするのか...何か私にできることはあるのかと考えています。(本学 国際関係学部3回生 20代 女性)

地階の展示室を先に見てから来たのですが、当時の人々の悲痛な叫び声が聞こえてくるような印象を受けました。こちらの展示も戦争への怒りや悲しみ、むなしさを喻すような作品がおおかったように思います。個人的には、手塚さんの作品に一番惹かれました。「なぜ日本の大人は正義の味方をあんなにつくっていたのにベトナムへはちっともおくってくれないのだろうか?」の言葉の重みを感じました。(京都市内 文学部 20代 女性)

反戦という強いメッセージ性が含まれている絵は、こんなにもパワーがあるものなんだと思いましたストレートなもの、皮肉をうたうもの、比喩表現のあるもの、人によってさまざまに心に残りました。

(京都造形芸術大学 10代 女性)

今、ここへ来る途中に9条改正反対運動をしている人たちがいました。そんな姿を思い出しながら見ていると、他人事、過去の話だとそう簡単には言えないという気持ちになりました。(京都造形芸術大学 10代 女性)

ベトナム戦争について深い知識がなかったので、今回の展示会でかなりのショックを受けた。日本人は昔自ら犯した罪を隠していたのではないかと思った。それは文章や言葉の表現によって事実をあやふやにしてきたのであろう。しかし、反戦ポスターはそういうごまかしなど筒抜けでベトナム人の苦しみ、戦争反対を行うすべての人々の気持ちをリアルに表現し、そして今日まで訴えてきている。多くの人にこのポスターを見てもらいたいと思った。(京都造形芸術大学 10代 女性)

私が中学～高校生の頃でした。ベトナムのグエンバンチョイ「あの人の生きたように」の本を読み強く戦争反対を心にきざみ込んだことを今も忘れません。イラク戦争反対、九条守ること、反貧困は大切です。このことを再び思いおこしました。

(京都市内 医療従事者 50代女性)

講演会の感想より

人との出会いによって西村先生の人生が変わっていったことを聞いて出会いは大切だと改めて感じました。また、広島原爆を体験された方が書かれる原爆の絵の重さは私の想像をはるかに超えるものだろうと思いました。直感を大切に生きるといいという事も今日学ぶことができました。(本学 産業社会学部2回生 20代 女性)

ともすれば、ベトナム戦争を知らずに過ごしてしまう世代です。歴史というものの重みを感じました。日本の皆は「反戦」を声を高めて訴えていた。一方で、「アメリカ」の言うなりにしか動けない「日本」を卑肉に描くポスターもあり、この矛盾が埋められない限り、「これからの日本」は、危ない、と感じてしまう。

(京都市内 大学院生 20代 女性)

「静かな戦い」という感じがしました。絵本を通して、静かだけど強い気持ちが感じられた。絵本を通して何を伝えるのかという事が、絵本を作るエネルギーになっているのだなど。書いている人が心を動かされる、人との出会いの大切さも思いました。(京都市内 50代 女性)

田島征三さんの精神は、いつも自由で、かざりがありません。絵と同じくらい楽しい!ベトナム戦争時のアーティストたちの自由な動きにとても心動かされました。このくらいのことが今できたらどんなにいいだろう。表現もちぎこまっている今だから。(50代 女性)

田島さんの本、子に孫にいろいろ買いました。その作者の方のお話を間近に聞き今日は着て大変良かったです。安齋先生との共通点も感じ、とてもよかったです。ベトナムで背のうに絵画用品が入っていたところ、胸があつくくなりました。(70代 女性)

連続講座の感想より

ベトナム戦争で大きな被害を受けているのに、他国(隣国)への援助のことを考えるなんて、ベトナムの人はすごいなと思いました。自分のことばかりでなく、他人のことを考える姿勢はみならわなければならないと思います。また戦争の悲惨さや、重さについて考えさせられました。話を聞くことができよかったです。

(本学 産業社会学部2回生 10代 女性)

ベトナムという場所が本当にきれいな所だと分かった。ベトナム人のすごさがわかり、またその何の罪のない人たちに残虐な行為をした米戦争をむごいと思った。

(本学 産業社会学部 20代 女性)

夏休み親子企画 「へいわ」ってなに?? 2008

日時：2008年7月20日(日)・7月21日(月) 10:00～12:00
 場所：立命館大学国際平和ミュージアム ミュージアム会議室
 対象：小学生以上、保護者
 参加者：計106名

7月20日(日) 52名 <学芸員実習生・学生ミュージアムスタッフを含む>
 7月21日(月) 54名 <学生ミュージアムスタッフを含む>

プログラム：120分

- ・高杉巴彦館長の挨拶
- ・安齋育郎名誉館長による平和のおはなし
- ・絵本作家西村繁男先生によるお話・お絵かき・平和へのメッセージ(7月20日のみ)
- ・紙芝居 学生ミュージアムスタッフによる国際協力紙芝居(7月21日のみ)
- ・平和へのメッセージミニワークショップ(7月21日のみ)
- ・参加証授与
- ・ミュージアム常設展示室の自由見学



全体構図を示す西村先生



安齋名誉館長と一緒に描く子供たち

今年で3度目となる夏休み親子企画ですが、今回は海の日連休に絞って、7月20日・21日の2日間で開催しました。企画には、平和について、戦争や世界で今おきていることについて考える機会になればと、子ども、大人合わせて106名の参加がありました。

最初に高杉館長の挨拶をいただき、世界では現在7人に1人が学校に行けない状態にあること、今日この企画に参加しているみんなは、「平和って何だろう?」ということを考え、自分の力を精一杯伸ばして欲しいという話を子どもたちにしました。

続いて安齋先生は、スプーン曲げやカードマジックを交えて平和について話をし、問題を解決するために自分に何ができるかを考え、小さなことからでもやってみようと語りかけました。

その後プログラムに従い20日は絵本作家の西村繁男先生と一緒に平和の想いを描いてみよう、として、幅450cm高さ180cmのキャンバスに平和の絵を描くことにしました。西村先生は、ご自身の描かれる絵本にはたくさんの方が出てくるが、ひとりとして同じ人は描かない。これは、いろんな人が共存し、大切にされる世の中が平和だと思っているからだ話し、今回の構図を参加者の前で示されました。参加した子どもたちと保護者の方たちは、大きなキャンバスに平和について思い思いの絵にたくしました。空に向かって走る電車の絵は、地球から宇宙へ向かって、平和の思いをのせて空高く向かっていく力強いものとなりました。

21日には、食べ物や水をテーマにした紙芝居を上演した後、学生ミュージアムスタッフによるワークショップを行いました。学生スタッフと子どもたちは輪になり、世界で起こっている現状を再度確認し、「今

私たちに何ができるか」をみんなで一緒に考え、子どもたちはそれぞれに感じたことを平和へのメッセージとして書き綴りました。

この企画に参加した子どもたちには、夏休み親子企画に参加し、平和と私たちの暮らしについて学んだことの証となる参加証を授与しました。カードには、氏名、参加日、参加番号が印字され、世界に1つしかないカードを、子どもたちはうれしそうに手にしました。

今回の企画には、たくさんの親子に参加していただくことができました。今後も、このような親子で一緒に考えることのできる企画を大事にしていきたいと思えます。

参加した保護者の方々からの感想

- ・「へいわ」=戦争が無いだけでなくもっと広い意味での平和を学習出来て良かったです。
- ・熱心な学生さんが次の世代の子に伝えようとしていることがわかって安心しました。お姉さんお兄さんに教えてもらって、子どもたちも身近に感じられたと思う。
- ・安齋先生のお話はとても子供達が興味をもてる様に工夫されていて理解しやすかったです。紙芝居も一生懸命子ども達も見ている分りやすくて良かったです。

小学生の子どもたちから寄せられた平和へのメッセージ

- ・自分でできる事をできるだけやろうと思いました。
- ・小さな事でも積極的にする。食べ物を残しかけたら、外国などから輸入していることを忘れずにしていきたいです。いつも当たりまえだと思っている事が本当に大変だと思いました。
- ・水、電気、食べ物などを大切に使う。暑くてもできるだけクーラーをつけずに、せん風きでがまんする。

小・中学校教員対象下見見学会

開催日時：2008年7月30日(水)、31日(木)

2008年8月21日(木)、27日(水)、28日(木)、29日(金)

13:00～14:40

所要時間：100分

料 金：無料

内 容：高杉巴彦館長の挨拶（10分）

安齋育郎名誉館長による平和講義体験（25分）

・安齋先生による小学校、中学校向けの「ミニ平和講義」を聞いていただきます。

展示見学（ボランティアガイドと学生ミュージアムスタッフによる解説あり）（35分）

・短時間でいくつかのコーナーをボランティアガイドの解説付で、ご見学いただきます。今年は新たに学生ミュージアムスタッフによる2階平和創造展示室の解説を加えました。

収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての活用（15分）

・収蔵品約4万点の中から、授業でお使いいただける「もの」資料を紹介します。

各種サービスのご案内（15分）

・ワークシートやガイドブックの事前送付等、より充実した見学にするためのサービスをご案内いたします。

2008年7月、8月、小中学校の先生方を対象に見学会を企画・実施いたしました。この見学会は昨年より企画しているもので、ほとんどの先生方が戦後世代となる中で、戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を先生方と共に考える機会とすることを目的としています。

昨年同様、前日までの参加受付、参加料金無料、複数の開催日など先生方が公務でも個人でも気軽に参加できるような設定をし、昨年にも増して多くの先生方にご参加いただいております。昨年ご参加くださった先生からの紹介で参加したという先生、今回良い話が聞けたので8月の下見見学会に同僚と再度参加しますといった様々な形態での参加にひろがっております。ご参加いただいた先生方からは内容がすばらしいぶん、もう少し時間をかけてあらためて見学したいという声もいただきました。これからも充実した見学をしていただくために様々な提案をしていけるよう、スタッフ一同、更に頑張ろうという思いを強くしました。

8月開催分につきましては、開催日の前日まで受付しております。

..... アンケートより抜粋

短時間内に、わかりやすくコンパクトに説明していただき、見学への見通しが持てました。スタッフやボランティアガイドさん、学生ガイドさんも、どの方も、親切でありがたかったです。

何度かよせていただいておりますが、新たな発見もあり、生徒たちを連れてきたいという思いがあらためて強くなりました。

これまで3年に1回来館させて頂いておりましたが、このような機会がなかったので、より有意義な見学や事前学習のあり方を学ばせて頂くことができました。



展示見学の様子



安齋育郎名誉館長による平和講義体験

博物館実習受け入れ

6月21日から、2008年度の立命館総合ミュージアム博物館実習がはじまりました。

例年、博物館実習は8月に集中して行なってきましたが、今年は、6、7月の週末を利用して2回、8月前半に2回と日程を分散して行います。実習生は立命館大学14名、他大学9名、計23名です。

博物館実習が8月に集中する背景には、夏休み中に帰省先で実習を済ませたい大学と学生側の事情が大きく影響しているようです。たしかに、大学の多い地域で全ての実習希望者の受け入れ先を探すことは難しく、また、前期には教育実習を受ける学生も多いため(学芸員課程と教職課程を両方とる学生もいるようです)夏休みに帰省先で実習を行なうのが便利なのでしょう。実習受け入れに消極的な博物館にお願いするときも、地元出身という「理由」はある程度有効です。

受け入れる博物館は、立派なカリキュラムを準備する余裕のあるところから、人海戦術の戦力として実習生に期待するところまで様々です。受入調整、資料準備、指導、評価などに多大な時間を要しますが、博物館に対する理解を深めてもらう大切な機会として、実習生を受け入れています。

週末日程も連日日程も、6人程度のグループで延べ5日間の館務実習を行ないます。実習内容にかわりはありませんが、多少進行に違いがあるようです。連日の実習は一気に乗り切ってお祭りです。実習生側も勢いで挑みますが、初めての施設、慣れない作業に毎日くたくたになり、自分の中で内容を整理し、振り返る余裕がもてないと思います。特に仕事の経験が少ない若い学部生には大変なことでしょう。週末ごとの実習の場合は、多少、施設や職員に慣れたり、前回の内容を振り返って定着させる心の余裕が持てるようです。受け入れる側も、次の実習までにある程度の時間的余裕があり、様子を見ながら調整できます。この原稿を書

いているのは、1グループの実習が終了した時点ですが、昨年の連日型の実習に比べて、実習後半に落ち着きがありました。

実習は、高杉館長による挨拶と導入の後、資料保存環境整備、資料整理など、実際の仕事を中心に実施しています。本年の特徴は運営部門研修として、ミュージアムの庶務や広報、ボランティアガイド養成や、予算面の説明も組み込んだことです。博物館の仕事に対する総合的な理解を深めてもらうよう設定しています。

資料保存環境整備としては、IPM(総合的有害生物管理)の説明と、実際に収蔵庫を守るための5段階の管理を経験してもらいました。資料整理では、戦前のポスターを中心とした資料カード作成と写真撮影を行いました。芸術的な写真を撮るわけではありませんが、光のむらや、フラッシュの反射、形のゆがみが出ないように撮影するには、細かい調整が必要です。実習生は、手間と時間がかかることに驚きながらも工夫をし、資料整理を進める手ごたえを感じているようでした。



カメラと資料が平行になるよう調整



資料とともに番号を写しこむ

『花はどこへいった』映画上映会

開催日：2008年7月7日(月)

時間：13時～16時30分～

場所：立命館大学衣笠キャンパス
以学館2号ホール

参加者：287名

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

企画協力：(株)如月社

《鼎談》

時間：15時～16時

対談：坂田雅子氏(映画監督) 鶴見俊輔氏(哲学者)

安齋育郎氏(立命館大学国際関係学部教授、国際平和ミュージアム名誉館長)

参加者：140名

作品：『花はどこへいった』[2007年](上映時間71分)

坂田雅子監督



鼎談の様子



監督サイン会の様子

2008年度国際平和ミュージアム特別展として「ベトナム反戦ポスター展 アーティストからのメッセージ」(会期：4月16日から7月21日)を開催し、その特別展の関連で、今回の映画「花はどこへいった」を上映することに決定致しました。今作品は、ベトナム戦争と枯葉剤被害者をテーマとしたドキュメンタリー映画でした。これまで何度かミュージアムのミニ企画展示室でも、現在のベトナムの人々の生活を展示してきました。ベトナム戦争が終わり30年あまりの歳月が経過したにもかかわらず、今なおその戦争の被害に苦しみながらも、力強く生きているベトナムの人々がいる、という事実を今回は写真ではなくドキュメンタリー映像を通して、知っていただく機会としたのです。

鼎談で、監督の坂田さんが、夫のグレッグさんの死が映画をつくるきっかけとなったこと。夫を失って、初めは何をしたらよいのか、どうしたらよいのかわからなかった。ただ事実を知ろうという気持ちから、ベトナムを訪問し色々な話を伺う中で、映画をつくることとなったとのこと。グレッグさんの反戦と平和への思いも伝えて頂きました。

鶴見氏は、ベトナム反戦運動をしてきたひとりとして、この映画を見てベトナムで枯葉剤の被害をうけている子ども達を育てている母の愛がある、これこそ人類のもつ愛だと感じた、と語っていただきました。

ミュージアムでは映画上映会を通して多くの学生や映画鑑賞者に、「平和」について考えるきっかけにし

て欲しいと考えています。秋の上映会にもご期待ください。

映画の感想に寄せられた沢山の声の中から幾つか紹介いたします。

<感想より一部抜粋>

枯葉剤が原因でベトナム戦争が3世代目までに及んでいるということは知りませんでした。また枯葉剤がエージェントオレンジと呼ばれていることも。「誰のせいでもなく戦争という時にうまれたから仕方がない」その言葉が諦めではなく、全てを受け入れ立ち向かう言葉に聞こえたことが人としても尊く、また戦争の無意味さを物語っているように思いました。幸せてなんだろうと思います。

見ていて辛くて目をそむけそうになった。ベトナム戦争は過去のものだと思っていたが大きな間違いだったと知った。

「ベトナム戦争」た「枯葉剤」など言葉や知識だけでしか知らなかったのだと思いました。戦争は形上は終わっていても、その爪あとが今も続いていて、どれほど恐ろしい生々しいものなのかも教えていただきました。きっと日本中の多くの人がこの事実を知らないはずなので、もっと多くの人にもみてもらいたいと思いました。

私たちと同世代の若者が今も苦しんでいるという事実。何をしなければならぬのかその都度考え、行動することを大事にしたい。

来館者60万人達成記念セレモニーを開催



記念のくす玉を割るヴィアートル学園洛星中学校

1992年の開館以来、立命館大学国際平和ミュージアムの通算来館者数が60万人を達成したことを記念し、2008年7月16日(木)、セレモニーを開催しました。この記念すべき区切りのセレモニーの主人公となったのは、ミュージアムの地元、京都の私立ヴィアートル学園洛星中学校3年生の皆さん222名です。

今回の見学に先立ち、洛星中学校では安齋名誉館長の平和講義が行われ、ミュージアムのガイドブックや案内DVDを用いた事前学習にも取り組まれるなど、様々な準備をされた上で見学の日を迎えられました。

洛星中学校の皆さんは、記念セレモニー前に1階ロビーに集合、ボランティアガイドの方々など関係者がみまもる中、教育文化事業部武田敦次長の司会で記念セレモニーが始まりました。

最初に、国際平和ミュージアムを代表して高杉巴彦館長が記念の挨拶を行い、「戦争でなくても平和でない状態は、飢餓や災害、民族対立など世界中に存在する。実際に問題解決の行動を起こせる人間となり、一人ひとりが平和をつくる主体となってほしい」と洛星中学の皆さんにメッセージをおくりました。その後、来館60万人認定証が高杉館長より、生徒会長の鈴木量大さんに贈呈され、会場は大きな拍手に包まれました。

鈴木量大さんは、その認定証を手に生徒代表として挨拶され「来館60万人達成の機会に来館することができ嬉しい」と感想を述べ、「このミュージアムで学んだことを生かし、平和な社会をつくっていききたい」と宣言されました。

その後、記念セレモニーは、大きなくす玉がつるされた常設展示室入り口に場所を移して行われました。司会の武田次長の掛け声とともに、生徒代表4人の手

によってくす玉が割られると、中から来館60万人を記念した垂れ幕が出現すると同時に、紙吹雪や風船が舞い、集まった人々から一斉に歓声が沸き起こりました。

また、生徒の皆さんが見学を終え学校に戻られる際、記念品であるフォトスタンドがお祝いの言葉とともに手渡されると、生徒の皆さんからは笑顔がみられました。

過去にも、国際平和ミュージアムでは区切りの来館団体がご見学された際には、記念セレモニーを行っております。前回の来館者50万人達成記念セレモニーは、2005年のリニューアルから約1年後の2006年6月27日に宮崎県の宮崎市立久峰中学校がご来館された際に行いました。

下記のとおり、ミュージアムの通算来館者数が30万人から40万人を突破するために要した期間が3年以上であるのに対し、40万人から50万人、また50万人から60万人に到達するまでが3年以下となっているように、ミュージアムへの来館者は2005年のリニューアル以降毎年増加しており、昨年度の来館者総数は開館以来最高の約5万人となりました。今年度も現在、昨年と同様の来館者数を記録しており、秋には第6回国際平和博物館会議も開催されることから、最多来館者数記録を更新することが期待されています。今後もより魅力のある、また、より質の高い見学をしていただけるミュージアムを目指し、関係者一丸となって努力していきたいと考えております。

過去の主な記念セレモニー

来館30万人達成記念セレモニー

- 2001年4月28日
- 広島県広島市府中市立南小学校
- ・30万人記念認定証を贈呈

来館40万人達成記念セレモニー

- 2004年11月18日
- 京都府京都市立金閣寺小学校
- ・40万人記念認定証、火の鳥パズルを贈呈

来館50万人達成記念セレモニー

- 2006年6月27日
- 宮崎県宮崎市立久峰中学校
- ・50万人記念認定証、記念ストラップ・クリアファイルを贈呈

第6回 国際平和博物館 会議開催

第6回国際平和博物館会議が、本年10月6日～10日の期間、立命館大学を中心に開催されます。

本学においては、昨年4月に「第6回国際平和博物館会議（2008年）の本学における開催について」、本年6月に「第6回国際平和博物館会議の成功に向けて（進捗報告）」を常任理事会で確認し、学園全体でこの会議を成功させる意志を固めてきました。そしてこの会議を全学的支援のもとで成功させることを通じて、世界の平和博物館運動の発展に寄与し、世界と日本の平和的・持続的発展への貢献を謳う「立命館憲章」の精神を具体化し実践することを確認しました。

今回の会議の概要

この会議は、10月6日の立命館大学以学館1号ホールでの開会セレモニーを皮切りに8日までアカデメイア立命21と以学館を中心に本学で実施し、9日は京都造形芸術大学で、10日は場所を広島に移し広島平和記念資料館にて開催される、全5日間のプログラムとなっています。さらに、11日・12日は、東京・大阪・出雲へのポスト・コンフェレンス・ツアーも計画されています。

会議は、世界各地から持ち寄られた平和博物館の現状と課題を巡る活発な分科会討議に加えて、大会初日に予定されている元内閣官房長官の野中廣務氏による特別講演、2日目の国連事務総長平和軍縮問題顧問であるケイト・デュース氏による記念講演、4日目京都造形会場での茂山一門による狂言の公演、最終日に予定されている被爆体験講話会など、多彩で魅力ある企画が数多く予定されています。

また、今回の会議は、国際平和博物館会議の開催母体であるINMP（平和のための博物館国際ネットワーク）の定款の策定をはじめとする組織の確立・発展を図る重要な役割を持っています。全世界の平和博物館関係者を集めて開催が予定されているINMP総会で、これらの課題が討議され方針が決定される予定です。

本学が会議の中で果たすべき役割

今日、平和研究・平和教育の分野においては、過去や現在の戦争・暴力の悲惨な実態を伝える活動を超えて、紛争解決・平和創造に寄与する理論の構築が求められています。世界の平和博物館も転換点に立ち立っています。とりわけ、世界の戦争博物館・反戦博物館が平和創造のための博物館・和解と共生の博物館へと刷新するために、立命館大学および国際平和ミュージアムは、INMPにおいて、理論的にも実践的にもリーダーシップを発揮する取り組みを進めることが求められています。

会議成功の取り組みを通じて、 本学の力にするもの

今回の会議においては、とりわけ学生の参画、附属校・大学を貫く平和教育の前進、APU（立命館アジア太平洋大学）でのバーチャル国際平和ミュージアムの構築などを中心に、今後、教学部や一貫教育部、APU等と相談しながら、本学の教学理念の新たな展開に資する企画内容の策定と具体化を進めることが求められています。現在学生参加の仕組みとして、記念講演等の学生聴講に加えて、学生分科会・学生企画展示会などの具体化、会議成功に向けたボランティア活動への学生参加呼びかけなどを進めています。また、本学の平和教育の枠組みに関わって、国際平和博物館会議の平和教育関連課題の一環として、昨年度国際関係学部客員教授として附属校の教育実践を含めた平和教育研究を推進されたベティ・リアドン氏（コロンビア大学教授）を招いて、附属校・大学を貫く平和教育研究の具体化を図ります。

また、世界80数ヶ国からの国際学生が学び集うAPUにふさわしく、国際平和博物館会議会期中の世界の歴史教科書展示会の具体化と、その後のAPUでの歴史教科書常設展示コーナーの具体化、バーチャル・ピース・ミュージアムの具体化などの課題を、APUと共同して進めていきます。

私たちが直面している国際紛争や地球環境問題など、人類の死活にかかわる重要な問題を解決するために、平和博物館は「ピース・リテラシー」（平和創造のための教養）の涵養と普及にどう貢献できるか - この大切な問題についての知恵を深め、共有するために、是非に皆さんの積極的なご支援、ご協力、ご参加を期待いたします。

常設展示見学者の感想

核兵器のひ害などの戦争についてよく分かった。戦争はよくないと改めて思った。核兵器はたくさんの人にひ害をあたえてそのひ害はものすごく大きいものだから。なぜ戦争って人をころして物事を決めるんだらうと思った。

京都府 小学生 男性

今はとても豊かなのに、むかしはこんなにひどい戦争があるなんて知りませんでした。戦争がこんなにひどいとは思いました。いろんなことが分かってとてもよかったです。

京都府 小学生 女性

戦争や平和のことが分かりました。ありがとうございました。また機会があれば絶対来たいです。

三重県 小学生 男性

ミュージアムに来てとっても感動した。自分たちに何かできる事はないか、とても探しています。心が痛かったです。貧しい子供たちの写真や昔の写真や資料を見て心が打たれました。募金やボランティアなど...何かできることがあるといいです!

岩手県 中学生 女性

私たちが未来のために過去のあやまちを伝えていかないと、あらためて感じられた。これからの世界が平和であってほしいとたくさんの人々が願っていると思う。

富山県 中学生 女性

展示物には戦時中の日本兵のリュックサックや服装、また当時の民家など実際に触れられたりできて良かった。リュックサックはとても重たくて、こんなものを食糧不足とかで弱ってる人もついだのかと思うと兵士たちの大変さが良く分かった。ベトナム戦争の資料にたくさんの子供たちが傷を追っている写真があり、アメリカ軍による無差別攻撃のひどさを見た。ビデオの中で言っていた「今世界で何が起きているかを知り、そのために何が必要か知り、自分ができることを見つけ一歩踏み出す」ということばが心に残った。この資料館に来てたくさん知れたので、何か自分にできることを探したいと思った。

新潟県 高校生 女性

自分が良く知らない戦争当時の様子などを良く知ることが出来ました。学校に帰って平和学習に役立てたいと思います。ありがとうございました。

神奈川県 中学生 男性

学校の授業ではならってない事や、知らなかった事実などを、展示や、映像で知ることができて、よかったです。今、私が考えられないと思うことがその時、おきていてすごくかわいそうでした。ぎゃくさつされた人々や、どれいのようにあつかわれた人の分まで私たちがくり返さないように『問題』を考えていけたらいいなと思います。

神奈川県 中学生 女性

今回初めて、この平和ミュージアムに来て展示物には1つ1つ説明があったり実際に触れることができるものもあって、戦時中の生活や軍隊の様子が良く分かりました。また、ビデオによる解説や、戦争体験者の体験談などで、より詳しく、当時の様子が分かりました。2階には無言館/京都館があり、自分は無言館に行ったことがあるので少しは分かっていたけど、その時には分からなかった、戦争に巻き込まれた若い画家の心情が伝わってきてよかったです。パンフレットも分かりやすく、クイズなどもあってよかったです。またぜひ来館したいと思います。

新潟県 中学生 男性

戦争の悲惨を強く感じる事が出来た。多くの人たちの命が非人道的な方法によってなくなったことによって今の平和があると感じた。

大阪府 高校生 男性

平和な時代に生きていて、つい戦争や被爆の残酷さを忘れてしまいがちですが、このミュージアムを見学して知らないことを発見することができてよかったです。

京都府 本学情報理工学部一回生
10代 男性

展示を拝見して戦争の真只中を過ごして来た日々がよみがえり、涙しました。戦争のむごさを未来、永劫に伝えなければならぬ使命が反戦運動になってほしいと思います。若者がどれほど理解しているか、聞いてみたいと思いました。女学生時代を学徒勤労動員として工場で一生涯懸命働いたこと等、苦しみの中にも勝利への思いをもって生きた青春時代、走馬燈のようによみがえりました。次第に戦争を知らない人達の時代に入ると思うと声を大にして、このミュージアムに足を運んで、知をみがいてほしいと思いました。

京都府 70代以上 女性

2007年4月
～2008年3月

入館者状況

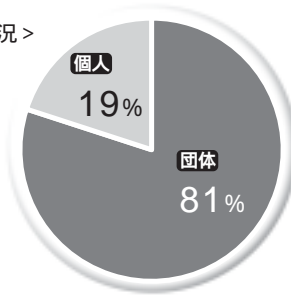
2007年度開館日数

298日

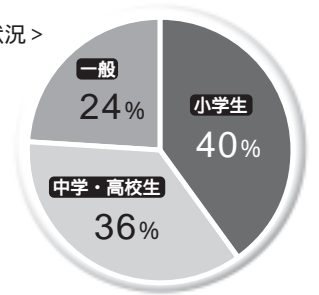
オープン後入館者数累計

583,455名

< 団体・個人入館状況 >



< 有料団体入館者数状況 >



2007年度		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計(名)	
常設展	個人(有料)		410	621	470	749	1,429	579	745	564	372	352	382	419	7,092	
	団体(有料)		1,115	3,698	3,437	1,673	805	1,348	7,230	6,293	2,097	534	1,427	826	30,483	
	学生・教職員等		1,773	1,803	855	304	841	595	371	1,666	313	167	234	433	9,355	
	特別展より		-	89	90	-	-	-	164	307	72	-	-	-	722	
	小計		3,298	6,211	4,852	2,726	3,075	2,522	8,510	8,830	2,854	1,053	2,043	1,678	47,652	
特別展	春季特別展『FEU NOS PERES ニューカレドニアの日系人展』													(5/10～6/30)	9,605	
	秋季特別展『世界報道写真展2007～WORLD PRESS PHOTO 2007～地球上でおきている、この瞬間を忘れないように』													(10/11～10/21)	1,744	
	立命館大学びわこ・くさつキャンパス会場													(10/23～11/11)	9,639	
	立命館大学アジア太平洋学会会場													(11/14～11/30)	1,898	
	秋季特別展『飯塚国雄絵画展 被爆した父への応え』													(11/15～12/15)	5,924	
小計(＊常設展からの入館者含む)															28,810	
講演会	ギャラリートーク・rimaconaコンサート										(1回目 5/26)			2回目 6/9)	123	
	NGOシンポジウム2007													6/6)	226	
	NGOワークショップ2007 2日間													(6/6、6/23)	50	
	映画上映会『映画 日本国憲法』													7/7)	258	
	夏休み親子企画『「へいわ」ってなに??2007』4日間													(7/28、7/29、8/11、8/12)	187	
	小学校・中学校教員ミュージアム下見見学会 6日間													(8/9、8/16、8/23、8/29、8/30、8/31)	102	
	世界報道写真展2007 公開講演会															
	『江川紹子氏講演会「報道の真実をどう読み解くか?」』立命館大学衣笠キャンパス会場														(10/12)	280
	『江川紹子氏、安齋館長対談「ニュースをどう読み解くか メディア・リテラシーを高めるために」』立命館大学びわこ・くさつキャンパス会場														(10/13)	186
	秋季特別企画『広河隆一氏講演会「生命と歴史を記録すること～フォトジャーナリズムの視点から～」』														(10/31)	228
	飯塚国雄絵画展 シンポジウム「戦争と平和と芸術」														(11/17)	110
	映画上映会『ひめゆり』														(12/12)	574
小計															2,324	

編集

後記

皆様方の陰で、本年7月16日には入館者数が60万人を達成することができました。まず、ご来館くださいました皆様方そして多くのボランティアのみなさま方に対して、スタッフ一同こころより厚く御礼申し上げます。

今年度の特別展は、「ベトナム反戦ポスター展 アーティストからのメッセージ」を企画いたしました。

一枚一枚のポスター作品が放つ反戦へのエンパワーメントのすごさにあらためてアートの果たす平和創造の役割の大切さを思い知らされました。田島征三氏と西村繁男氏のお二人が、その開催記念講演会の講師として駆けつけてくださいました。

映画上映会の「花はどこへいった」はベトナム戦争での枯葉剤による被害者を取り扱った作品で、盛況のうちに終わることができました。哲学者鶴見俊輔氏とこの映画をつくられた坂田雅子監督をお招きすることができました。安齋名誉館長とともに、素晴らしい鼎談をしていただいたことに深く感謝申し上げます。

本年10月には、念願の「第6回国際平和博物館会議」が京都と広島で開催されます。多くの入館者が小中学生によって占められております今、将来の国際平和ミュージアムはこうした小中学生たちがしっかりと「平和とは何か」を学べるミュージアムにしていかなければなりません。そして、世界中の平和学や博物館学を発展させていく学び舎としての役割も期待されています。どうぞ今後とも皆様方のご協力をご支援をよろしくお願い申し上げます。

特別展

立命館大学国際平和ミュージアム2008年度秋季特別展

世界報道写真展2008

WORLD PRESS PHOTO 2008

立命館大学びわこ・くさつキャンパス (BKC)

会 期：2008年10月1日(水)～10月19日(日) 会期中無休

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC) Eポックホール

立命館大学国際平和ミュージアム (衣笠キャンパス)

会 期：2008年10月21日(火)～11月16日(日) 月曜休館

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール



ティム・ヘザリントン (英/Vァニティ・フェア誌)
「アフガニスタンのコレンガル渓谷の掩蔽壕で休息をとる米軍兵士」

開館時間：9時30分～16時30分 (入館は16時まで)

参観料金：大人500円、中・高生300円、小学生200円

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、滋賀県、草津市、大津市、
滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、

NHK大津放送局 (びわこ・くさつキャンパス開催分)、びわ湖放送株式会社、株式会社エフエム滋賀、

京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、

NHK京都放送局 (衣笠キャンパス開催分)、-STATION FM KYOTO、FM79.7京都三条ラジオカフェ

協 賛：キャノン株式会社、キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティ エヌ ティ エクスプレス株式会社

協 力：グーグル株式会社

立命館アジア太平洋大学 (APU)

会 期：2008年11月19日(水)～11月30日(日) 会期中無休

会 場：立命館アジア太平洋大学 (APU) 本部棟2階 コンベンションホール

開館時間：10時～17時 (入館は16時半まで)

参観料金：大人500円、中・高生300円、小学生以下無料

主 催：立命館アジア太平洋大学、立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

聴講無料

公開記念講演会

〔直接会場にお越し下さい。〕

講 師：中村 梧郎氏 (フォトジャーナリスト)

演 題：「戦争と写真 “枯葉作戦” から見えるもの」

日 時：2008年10月28日(火) 12:30～14:00

場 所：びわこ・くさつキャンパス

ローム記念館大会議室

対 談：中村 梧郎氏 (フォトジャーナリスト)

安齋育郎国際平和ミュージアム名誉館長

演 題：「今も続く枯葉剤の悲劇 アメリカはどうか対応したか」

日 時：2008年10月29日(水) 14:40～16:10

場 所：衣笠キャンパス 以学館1号ホール

昭和20年の中学生展

会 期：2008年11月21日(金)～2008年12月21日(日) 月曜休館

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

開館時間：9時30分～16時30分 (入館は16時まで)

参観料金：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、
小学生200円(150円) ()内は20名以上の団体料金です。
※特別展の参観料金で常設展示もご覧いただけます。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

協 力：沖縄県平和祈念資料館、瑞泉同窓会、長崎原爆資料館、広島平和記念資料館、栗東歴史民俗博物館

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、
KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社、α-STATION FM KYOTO、
FM79.7京都三条ラジオカフェ

開催趣旨：第二次世界大戦時、日本は国の全精力を戦争に注ぎ込みました。現在の中高生に当たる子供たちも、国民学校、女学校、中学校、青年学校などさまざまな学校に通いながら、戦争を正当化し、協力するような教育を受けていました。また、戦争末期になると軍需工場や農作業、建物疎開などの労働にも動員されました。国家総動員体制のもと、学ぶことを奪われ、生産現場などに動員された子どもたちにとってその作業や生活は過酷な経験でした。銃後は、これら勤労働員学徒たちによっても支えられていたのです。ひたすら労働に奉仕した結果、空襲や天災、事故などで短い生涯を終えた子どもたちも数多く存在します。

この展覧会では、学校の教科書や備品など当時の学校の様子を伝える資料と、その中で生きた子どもたち一人一人の様子を伝える資料を約200点展示します。



関連イベント

昭和20年、中学生だった方に当時をふりかえり体験をお話いただきます。

日時：12月6日、13日、20日(毎土曜日) 13時～、14時～、15時～ の各日3回。

ミニ企画展示室

フィリピン写真展 THE LIVES 08 ～ごみ山・スラムの日常～

会 期：2008年9月10日(水)～2008年9月28日(日)

17人の写真展 (第6回国際平和博物館会議関連展示)

会 期：2008年10月1日(水)～2008年10月16日(木)

附属校教育実践連続展示

会 期：2008年10月19日(日)～2008年12月25日(木)

2008年10月19日(日)～2008年10月31日(金) 立命館小学校
2008年11月2日(日)～2008年11月14日(金) 立命館慶祥中学校・高等学校
2008年11月16日(日)～2008年11月28日(金) 立命館宇治中学校・高等学校
2008年11月30日(日)～2008年12月12日(金) 立命館守山中学校・高等学校
2008年12月14日(日)～2008年12月25日(木) 立命館深草中学校・高等学校



フィリピン写真展



昨年度の連続展示の様子



第16巻第1号 (通巻44号) 2008年8月26日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行者



立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899
<http://www.ritsumeai.ac.jp/>